

橋本 将 (金沢大学)

mhashimoto@staff.kanazawa-u.ac.jp

要旨

本研究は、「私たち言語学者」、「太郎たち高校生」のような一般化された代名詞-名詞表現（(代)名詞-名詞表現）の分析を再検討する。従来の分析では、「*若者たち大学生」などの例から、(代)名詞-名詞表現の第1要素に普通名詞は現れることができないとされていたが、本研究ではそれに対する反例を示し、先行研究に過小生成の問題と過剰生成の問題があることを指摘して、代わりに、「たち」に関する投射 AssocP が#P と CaseP の間に存在して、「たち」の持つ素性と一致を起こすという分析を提案する。また、第1要素に普通名詞が現れる場合に見られる適格性の違いについては、(代)名詞-名詞表現の第2要素の意味的な寄与は前提 (presupposition) であり、その前提が満たされているかどうかによる適格性の違いであると主張する。

1. 代名詞-名詞表現の一般化

日本語には、英語の “we linguists” と似た代名詞-名詞表現がある。

- (1) {私たち/あなたたち/彼ら}言語学者が

代名詞-名詞表現は、複数性制約を示す：

- (2) *{私/あなた/彼}言語学者が

この種の「NP₁[連想複数形] + NP₂」の表現は、第1要素が代名詞である場合だけでなく、固有名詞、固有名詞の等位接続、それに指示詞 + {人/子} であっても可能である。（「人/子」は通常の普通名詞（語彙名詞 full lexical nouns）と比べ意味が希薄で、異なる振る舞いを見せるため、Inokuma (2008, 2009) はこれらを軽名詞 (light nouns) と呼び、通常の普通名詞とは異なる範疇に属するとしている。）いずれも複数性制約を示すため、同じ構文だと考えられる (Inokuma 2009¹) :

- (3) a. 太郎たち大学生 (Inokuma 2009: 33(8a))
 b. 太郎や花子たち喫煙者 (Inokuma 2009: 33(8c))
 c. {あの/その/この} {人/子}たち高校生 (Inokuma 2009: 33(8b))
- (4) a. *太郎大学生
 b. *太郎や花子喫煙者²
 c. *{あの/その/この}[人/子]高校生

¹ 固有名詞でも可能であることは、Sode (2004), Furuya (2004) でも指摘されている。

² Inokuma (2009) は(3b)に完全に対応する「たち」のない例を挙げておらず、代わりに「と」を使った例「*太郎と次郎と花子学部生が手伝った」を挙げている。また、Furuya (2004) は、Yoshihisa Kitagawa による同様の例を挙げている：「*ジョンとメアリー労働者は今日も働いた」。これらの「と」を「や」にしても文法性判断は変わらない：

- (i) *太郎や次郎や花子学部生が手伝った。
 (ii) *ジョンやメアリー労働者は今日も働いた。

そして、先行研究は、(6)のような例を挙げて、この表現の第1要素に普通名詞が現れることはできないということで一致している。

- (5) a. *学生たち労働者は今日も働いた。 (Furuya 2004:235(20))
b. *選手たち優勝者がテレビに出た。 (Sode 2004:207(36a))
c. *若者たち大学生 (Inokuma 2009:33(11a))

一方で、この表現の第2要素については、代名詞、固有名詞、指示詞 + {人/子}などは現れることができない (Inokuma 2009).

- (6) a. *太郎たち彼ら (Inokuma 2009: 35(16a))
b. *彼ら太郎たち (Inokuma 2009: 35(16b))
c. *彼らあの{人/子/大学生} (Inokuma 2009:35(17a)を改変)

また、次の例でわかるように xNP₂には連想複数形態素を使うことができない。

- (7) ??私たち日本人たち³ (Inokuma 2009:35(17b))

以下では、Inokuma (2009) に従って、この表現を総称して「(代) 名詞-名詞表現」((pro)noun-noun construction)と呼び、第1要素を xNP₁、第2要素を xNP₂と書くことにする。

2. xNP₁と xNP₂に現れる要素の相補性、数量詞の分布、指標的要素の SpecCaseP 基底生成分析

2.1. xNP₁と xNP₂に現れる要素の相補性

1節で述べた xNP₁と xNP₂の持つ性質はそれぞれ次のようにまとめられる (Inokuma 2009).

- (8) a. xNP₁は(i)代名詞、(ii)固有名詞、(iii) 指示詞+軽名詞のいずれかでなければならない。また、
b. xNP₁は明示的に「たち」を伴わなければならない。 (Inokuma 2009:34(15))
- (9) a. xNP₂は語彙名詞句でなければならない。また、
b. xNP₂は「たち」を伴うことはない。 (Inokuma 2009:35(20))

Inokuma (2009) は(i)代名詞、(ii)固有名詞、(iii) 指示詞+軽名詞をまとめて指標詞 (Indexicals) と呼んでいるので、以下ではその呼び方に従うことにする。

2.2. (代) 名詞-名詞表現と数量詞

数量詞は xNP₂の前にも後にも現れることができる⁴：

³ ただし、Furuya (2004) は類似の表現 (例えば「あなた方先生たち」(Furuya 2004:231(9b)) をよいとしている。

⁴ Inokuma (2009) は、数量詞は xNP₁の前に現れることはできないとして、次の例を挙げている。

- (i) *3人の私たち大学院生が論文を執筆した。 (Inokuma 2009:35(19))

しかし、例(ii)のように数量詞が xNP₁の前に現れても問題がない文もあるので、例(i)が悪いのは数量詞が xNP₁の前に現れたこと自体にあるのではないと思われる。

- (ii) 10人の太郎たち3年生が昨日の試合で勝てたのはキーパーがとびぬけて上手だったからだ。

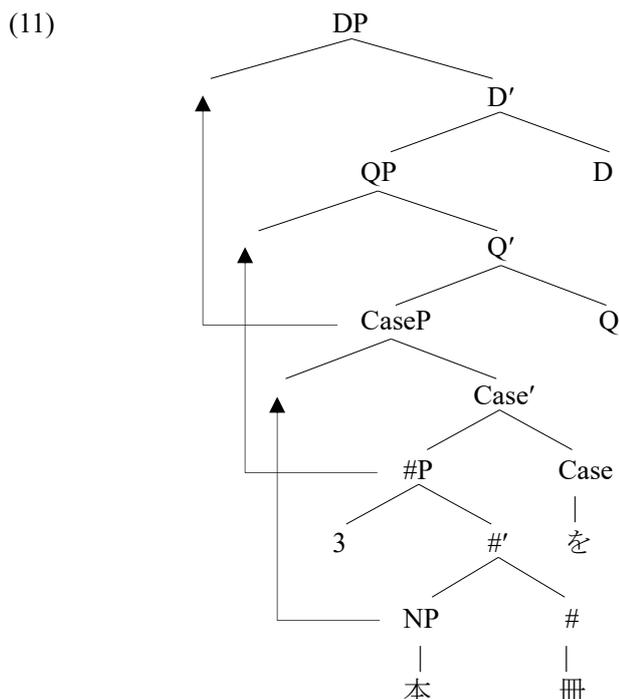
ただ、Inokuma の提案する分析には数量詞が xNP₁の前に現れるのを防ぐメカニズムはなく、数量詞が xNP₁の前に現れる語順も派生可能だと思われるので (xNP₁「私たち」が CaseP に基底生成されることを除くと「3人の大学院生」が生成されるのと同じ派生である)、ここでは問題としない。

- (10) a. 私たち 3 人の大学院生が雑用を頼まれた。 (Inokuma 2009:35(18a))
 b. 私たち大学院生 3 人が懇親会に出席します。 (Inokuma 2009:35(18b))

2.3. 指標的要素の SpecCaseP 基底生成と相補性 (Inokuma 2009)

上で述べた (代) 名詞-名詞表現の振る舞いを説明する分析として, SpecCaseP に指標詞が基底生成されて (代) 名詞-名詞表現が生まれるという分析が, Watanabe (2006) の提案する日本語の名詞句構造の下で提案されている (Inokuma 2009)⁵.

Watanabe (2006) は, 日本語の名詞句と数量詞の組み合わせが持つ様々な語順を説明できる名詞句の構造として, (11) を提案している.



NP の SpecCaseP への移動のみの場合は (12a) が, それに続いて #P の SpecQP への移動も起こる場合は (12b) が, 更にそれに続いて CaseP の SpecDP への移動も起こる場合は (12c) が得られる.

- (12) a. 本 3 冊を
 b. 3 冊の本を⁶
 c. 本を 3 冊

Inokuma (2009) は, 構造 (11) を仮定して, (代) 名詞-名詞表現について次の分析を提案している.

- (13) i. The Indexical elements, i.e., xNP₁, are based-generated in SpecCaseP. (Inokuma 2009:37)
 ii. Complementarity between Direct-Referring Indexicals and Property-Denoting nominals:
 xNP₂ (that is, #P) that denotes properties cannot appear if the Indexicals in SpecCaseP directly refer to all of the individuals denoted by the whole DP. (Inokuma 2009:40(34))

⁵ (代) 名詞-名詞表現の異なる分析として, xNP₁ と xNP₂ は名詞句内で小節 (small clause) を成しているという分析 (Furuya 2004, 2008) もある. この分析について, 本研究では詳しく扱わないが, xNP₁ と xNP₂ が叙述関係にあるのならば, 例えば, 数量詞を含む非文「*太郎たちは日本人 50 人だ」に対して「太郎たち日本人 50 人が出席した」がよいのはなぜか, ということの説明が必要であると思われる.

⁶ Watanabe (2006) では, 「の」は構造的には実現されず, 形態的に挿入されると仮定されている.

(13i) により, xNP_1 には代名詞, 固有名詞, 指示詞+{人/子}しか現れないということが説明される. そして, (13ii) により, 複数性制約が説明される: 例えば (14)で xNP_1 が複数の「太郎たち」であれば, この名詞句により表示される全ての個体を直接指示していないので, (13ii) の if 節の内容は満たされず, xNP_2 が現れることができるが, xNP_1 が単数の「太郎」であれば, 表示される全ての個体 (つまり太郎) を直接指示しているので, (13ii) の if 節の内容が満たされ, xNP_2 が現れることができない, という説明である.

(14) 太郎*(たち)高校生

3. 指標的要素の SpecCaseP 基底生成+相補性分析の問題点

前節で述べた, 指標的要素の SpecCaseP 基底生成と, 指標詞と特性 (property) を指示する名詞の相補性に基づく (代) 名詞-名詞表現の分析には, 次のような問題点がある.

3.1. 過少生成の問題

先行研究では xNP_1 には普通名詞が現れることができないとされていたことを 2.1 節で述べたが, xNP_1 には普通名詞は現れないというのは過剰な一般化であると思われる. なぜならば, 実際は普通名詞でも可能な場合があるからである:

(15) 東京 2020 オリンピック・パラリンピック. この大会でボランティア活動の主役となる高校生たち若者が, オリンピック・パラリンピックへの参画のアイデアを提案. (千葉県庁 2016⁷)

これは, (16) のように複数性制約に従うので, これも (代) 名詞-名詞表現に属すると考えられる.

(16) *この大会でボランティア活動の主役となる高校生若者が, オリンピック・パラリンピックへの参画のアイデアを提案.

SpecCaseP に基底生成されるのは指標的要素だとすると, (15)のように普通名詞が xNP_1 に現れる表現が除外されてしまう.

3.2. 過剰生成の問題

「太郎たち」は「太郎」と違いその指示対象が明確でないが, それは「太郎や花子」などの表現についてもいえる. 相補性仮説 (14ii) が正しいならば, 「太郎たち」と同様に「太郎や花子」も (代) 名詞-名詞表現が可能だと思われるが, 実際はそうでない:

- (17) a. 彼は太郎たち大学院生を呼んだ.
b. *彼は太郎や花子大学院生を呼んだ.

4. 連想複数素性の一致

前節で述べた問題解消のために, 「たち/ら」は連想複数素性 (ここでは[assoc]と書くことにする) を持ち, 連想複数形の名詞句では#P と CaseP の間に[assoc]素性を持つ主要部 Assoc の投射 AssocP が存在するという分析を提案する (AssocP 以外は Watanabe (2006) の日本語の名詞句構造 (11) を仮定する):

⁷ 千葉県庁「2020 ちばおもてなし隊セカンドステージ全体交流会の開催について」2016 年 12 月 15 日.
<https://www.pref.chiba.lg.jp/kkbunka/npo/volunteer/h28kouryukai.html>

(18) i. 「たち/ら」は[assoc]素性を持ち、名詞+「たち/ら」は[assoc]素性を持つ名詞である.

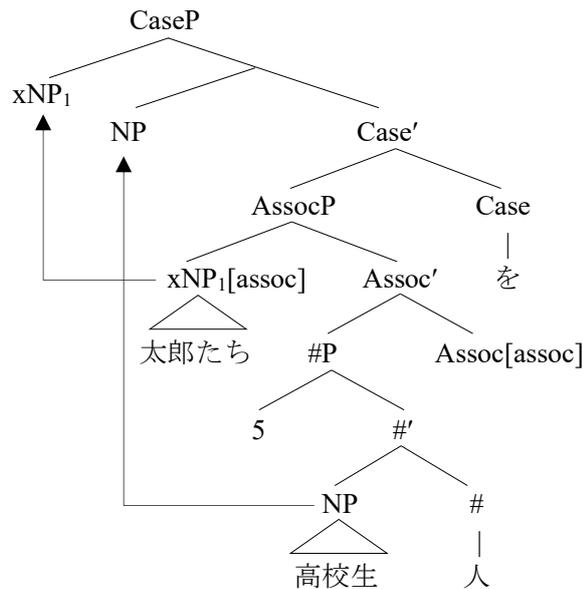
ii. #P と CaseP の間にある投射 AssocP が存在しうる :

[DP Spec [QP Spec [CaseP Spec (AssocP Spec) [#P Spec [NP] #] (Assoc) Case] Q] D]

iii. AssocP の主要部 Assoc は、音形を持たないが[assoc]素性と EPP 素性を持つ.

例えば、「太郎たち高校生 5 人を」の派生は (19) のようになる. (19) では、#P ([#P 5 [[NP 高校生] 人]]) に[assoc]素性を持つ要素がないため、[assoc]素性を持つ名詞である「太郎たち」が SpecAssocP に基底生成されて、その[assoc]素性と AssocP の主要部 Assoc の持つ[assoc]素性の一致が起こる. Case 主要部は EPP 素性を持ち、名詞句 (NP 「高校生」、xNP₁ 「太郎たち」) は格の一致のため SpecCaseP へ移動し、その結果「太郎たち高校生 5 人を」が得られる.

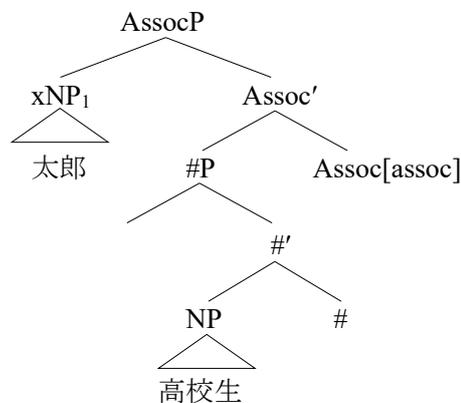
(19)



また、数量詞の位置が異なる「太郎たち 5 人の高校生を」は、(19) から更に#P ([#P 5 [t_{NP} 人]]) が CaseP の上の QP の Spec に移動し、xNP₁ 「太郎たち」が QP の上の DP の Spec に移動して生成される⁸.

この分析では、(代) 名詞-名詞表現の複数性制約は、[assoc]素性を持つ主要部との一致によって説明される. xNP₁ が単数の場合として「太郎高校生 (を)」を考えると、その AssocP は (20) のようになり、Assoc 主要部の[assoc]素性の一致が起こらないので派生が破綻する.

(20)



⁸ この部分は Inokuma (2009) の分析と変わらない.

NP (xNP₂)が連想複数形態素を伴う場合 (例えば「高校生たち」) は、それと Assoc 主要部が一致をするので、SpecAssocP に[assoc]素性を持つ xNP₁ が基底生成されることはない。これにより性質(9b) (下に再掲) が説明される。

(9) b. xNP₂は「たち」を伴うことはない。 (Inokuma 2009:35(20))

性質(9a) (下に再掲) については、(9b)に帰着させることが可能である。というのは、指標詞 ((i)代名詞, (ii)固有名詞, (iii) 指示詞+軽名詞) は、語彙名詞句と違って連想複数形態素が伴わないと単数解釈しかできないが、xNP₂には連想複数形態素を用いることができない(=9b)ために、xNP₂に指標詞を置くと複数解釈が得られず、意味的に破綻すると考えられるからである。

(9) a. xNP₂は語彙名詞句でなければならない。 (Inokuma 2009:35(20))

以上、この分析が xNP₁の複数性制約(8b)と xNP₂の性質(9a,b)を説明できることを見たが、この分析は3節で述べた過少生成の問題と過剰生成の問題も解決する。まず、過少生成の問題に関しては、xNP₁はこの分析では Assoc 主要部の[assoc]素性と一致を起こすものであればよいので、xNP₁に現れる名詞は指標的要素に限られず、普通名詞でもよい。そして、過剰生成の問題に関しては、「太郎や花子」は「たち」が持つ[assoc]素性を持たないため Assoc 主要部の[assoc]素性と一致を起こさない、と説明できる。

5. 普通名詞の xNP₁ 再考 : xNP₂ の意味的な寄与

4節の過少生成の問題の説明は、逆に、先行研究で挙げられていた例、例えば (7c) (下に再掲する) がなぜ悪いのかを説明する必要性が生じる。

(7) c. *若者たち大学生 (Inokuma 2009:33(11a))

ただし、注意すべきことに、適切な文脈を補えば (7c) も適格になる。例えば、次のような状況とその状況で発話された文を考えてみると、ここでは「若者たち大学生」はよい。

(21) (状況 :) 20歳前後の大学生が集まってできた若者のチームと、70歳前後の高齢者のチームがゲートボールの試合をした。

「ゲートボールの試合は、若者たち大学生が勝った。」

よって、正確には (22) を説明する必要があることになる。

(22) i. 「高校生たち若者」はよい (例 (14) 参照)

ii. 「若者たち大学生」は適切な文脈を与えれば適格、そうでなければ不適格

この説明に繋がることとして、(23) を提案する。

(23) (代) 名詞-名詞表現の xNP₂ の意味的な寄与は、前提 (presupposition) 「xNP₁ は xNP₂ である」である。

実際、例えば、「太郎たち高校生」が含まれる文 (24a) を(24b)のように否定のスコープに埋め込んでも、「太郎たちが高校生である」ことは否定されない。

(24) a. 太郎たち高校生が頑張った

b. 太郎たち高校生が頑張ったということはない

また、presupposition plug である「言う」のスコープに埋め込むと、「太郎たちが高校生である」とはい

えなくなる：

(25) 花子_iは次郎に太郎たち高校生が彼女_iのために頑張ってくれたと言った。

(22) の説明に戻ると、一般的に、命題「高校生は若者である」は *common ground* に存在している。そのため、「高校生たち若者」の前提「高校生たちは若者である」は特に文脈を制限しなくても満たされる。一方、命題「若者は大学生である」は一般的には *common ground* に存在しない。若者には大学生だけでなく高校生や大学に進学しない者などもいるからである。そのため、「若者たち大学生」は何も文脈が与えられない場合「若者たちは大学生である」という前提を満たせず不適格となる。しかし、例 (21) では、「若者たちは大学生である」という前提を満たす状況が与えられているので、「若者たち大学生」は適格となる。

この説明は先行研究で挙げられていた残りの例 (7a,b) (下に再掲する) の不適格性も同様に説明する。

- (7) a. *学生たち労働者は今日も働いた。 (Furuya 2004:235(20))
b. *選手たち優勝者がテレビに出た。 (Sode 2004:207(36a))

一般的には、「学生たちは労働者である」ことも「選手たちは優勝者である」ことも *common ground* にないため、これらの例は悪い。

なお、「私たち日本人」などのように *xNP*₁ が普通名詞-たちでなく、指標詞 ({代名詞/固有名詞/指示詞 + 軽名詞}) -たちである場合は不適格性が生じないが、これらは前提調節 (*presupposition accommodation*) がしやすい点で普通名詞-たちと異なる。例えば、選手たちが全て優勝者である状況を考えるのは手間である (通常、選手たちのほとんどは優勝者ではない) が、私たちが全て優勝者である状況を考えることは容易である。

6. まとめ

本研究では、(代)名詞-名詞表現について、第1要素に普通名詞も可能であること、第1要素が「たち」を含むか「や」を含むかで表現の文法性が変わることを指摘して、名詞句内には連想複数句 *AssocP* が #P と *CaseP* の間に現れることができ、その主要部と「たち」が一致を起こすという分析を提案した。そして、第1要素に普通名詞が現れる例に見られる適格性の違いについては、第2要素が表す前提が関与しているという説明を提案した。

参考文献

- Furuya, Kaori. (2004) "Us linguists." In Aniko Csirmaz, Youngjoo Lee, and Mary Ann Walter. (eds.) *Proceedings of WAFL 1: Workshop on Altaic Formal Linguistics I* (MIT Working Papers in Linguistics 46), 227–242.
- Furuya, Kaori. (2008) "DP hypothesis for Japanese "bare" noun phrases." *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 14: 149–162.
- Inokuma, Sakumi. (2008) "N-no hito and the syntax of Japanese nominal phrases." *Linguistic Research* 24: 13–27.
- Inokuma, Sakumi. (2009) "So-called pronoun-noun construction in Japanese: A new perspective on nominal syntax." *Linguistic Research* 25: 31–42.
- Sode, Rumiko. (2004) "Nominal apposition in Japanese." *Southwest Journal of Linguistics* 23: 187–214.
- Watanabe, Akira. (2006) "Functional projections of nominals in Japanese: Syntax of classifiers." *Natural Language & Linguistic Theory* 24: 241–306.